

未来への伝承

第188回

色川三中の黒船情報『片葉雑記補遺』の刊行

「ふだんは古道具を売っている神田や芝の店が、今は武器を売っている。山のように積まれた甲冑に侍が群がっている。いったい侍は、普段何に備えていたのだろう（嘉永7（1854）年2月3日『片葉雑記一』」。侍を慌てて甲冑を買いに走らせたのは、泰平の眠りを覚ますと詠まれた、黒船の来航でした。軍備を整えていなかった侍にあきれているのは色川三（1801～1855）です。「未来への伝承」では数回にわたり三を紹介してきました。三中は号で、通称は三郎兵衛、田宿町（現大手町）に生まれ、商売のかたわら国学を研究し、古代や中世の古文書を正確に写しとったため、現代の歴史学にも大いに貢献しています。

令和3年6月「未来への伝承」169回「色川三『片葉雑記』」にて、三中の和歌集や草稿など10件が茨城県指定文化財に追加されたことを紹介しました。このうち「片葉雑記」および「片葉雑集 紀行部」を翻刻し、この度『片葉雑記補遺』として刊行しました。幕末史の研究者宮地正人氏の解説も付いています。既刊の中井信彦『片葉雑記 色川三黒船風聞日記』（慶友社／昭和61年）と合わせると、三中が集めた黒船情報全部を読むことができます。

『片葉雑記補遺』は4冊を収録しており、うち2冊は三中自身の日記『片葉雑記』ですが、残りの2冊『片葉雑集 紀行部』には、三中が弟子に黒船を偵察させた日記が含まれています。黒船の情報を集めるた

め、旅人からの聞き取りや江戸の知人からの手紙を参考にしていた三中は、現場を見て正確な情報を収集したいと考えました。しかし商家の主人である自分自身が、浦賀（神奈川県横浜須賀町）に赴くことは不可能であるため、弟子2人を派遣することにしたのです。

嘉永7年1月19日早朝、2人は土浦を出発し、江戸を経て22日には神奈川（横浜市神奈川区）に入り、23日には浦賀近くの金沢（同金沢区）へ到着し、7艘の異国船からボートが降ろされ、河口まで乗り入れる様子を見守りました。5日間浦賀に滞在し、再び江戸を経て土浦に戻ってきたのは、2月4日のことでした。

異国船を見に行く者は打首にするという噂があったと三中は書き留めています（嘉永7年1月28日『片葉雑記三』）。弟子たちが処罰される危険を冒しても出かけたのは、三中との強い信頼関係があり、その期待に応えようとしたからでしょう。弟子の1人は大久保一学（1834～1907）21歳で、結城郡野爪村（現八千代町）鹿島神社神官の家に生まれ、前年の嘉永6年4月に三中の弟子になったばかりでした。三中に対する思慕の情が篤く、三中の生前の口述筆記をもとに「田令図解抄」をまとめ、この書は三中が著した唯一の書物になりました。安政2（1855）年6月23日、三中の死を看取りました。もう1人は菅原長好（1812～1905）で、もと

は和学講談所御用掛塙忠宝の門人でしたが、嘉永5年2月、鹿島・香取参詣の途中、三中宅に寄る機会があり、そこで三中の学問の深さに傾倒して入門しています。

『片葉雑記補遺―色川三中の黒船情報』は市立図書館で貸し出しています。博物館受付では1冊3千円で販売しています。彼らが見てきた浦賀の様子はどのようなだったのか、ぜひ手にとってお読みください。

問 市立博物館（0824・2928）



左から「片葉雑集 紀行部」（2冊）・「片葉雑記」（2冊）
（茨城県指定文化財 市立博物館所蔵）